

日常生活に困り感のある人の語りと困り感の様態 —対象者や周囲の人々が“理解しやすい”アセスメントの あり方検討に向けた予備的調査—

田中里実¹⁾・中鉢路子¹⁾・北村文昭¹⁾・横山舜²⁾・綿引一貴²⁾・薬師神玲子¹⁾

1) 青山学院大学教育人間科学部心理学科

2) 青山学院大学大学院教育人間科学研究科心理学専攻 博士後期課程

Interview survey on how people talk about their daily life problems: Preliminary study for developing better assessment methods

Satomi Tanaka, Michiko Chuubachi, Fumiaki Kitamura, Shun Yokoyama, Kazuki
Watahiki, Reiko Yakushijin

1) Department of Psychology, Aoyama Gakuin University

2) Doctoral Course, Education, Psychology and Human Studies, Aoyama Gakuin University

Abstract

We have been investigating the clinical applications of eye-tracking to improve the quality of life of people with problems in their daily life. We first classified the details of problems in everyday life and how these problems are related to people's eye movements and cognitive functions. Then, we conducted an interview survey on people's everyday problems. Participants (N= 3) with problems in their daily lives due to differences between what they were good at and not good at doing took part in the survey. The results indicated that the participants had difficulties in multiple daily life situations related to their executive function and visual cognition. It was necessary to conduct psychological tests, examine eye movements, and investigate the relationship between eye movements and their everyday difficulties. The results indicated that the participants experienced problems and tried to understand the causes of these problems and find solutions. These results suggested the advantages of therapists inquiring about how clients think about their problems and manage them. It is suggested that these inquiries can lead to awareness of clients.

Key Words: problems in everyday life, cognitive function, eye movements, narratives

問題

心理臨床、特に発達障害臨床においては、支援の初期段階にアセスメントを行うことが一般的である。アセスメントとは、単に心理検査の実施を指すのではなく、結果を対象者本人や家族を中心とした周囲の人々にフィードバックをするまでの

一連のプロセスを指す。対象者の自己理解や周囲の人々の対象者への理解を深め、生活の質の向上に寄与することを目指し行われるものである。

近年は、知的発達に遅れのない発達障害の子どもに対する支援の必要性も広くいわれており、アセスメントでは単に知的発達の遅れの有無を調べ

るだけでなく、認知機能の特徴を詳細に調べ、学習指導や、生活での困りへの対処に役立てようという考え方が一般的になっている。例えば学齢期の子どもの場合、知的水準を調べるためにWISC-IV 知能検査や田中ビネー知能検査V等の知能検査を実施し、認知処理の特徴やバランスについてKABC-IIを実施するといったテストバッテリーが組まれることが多い。KABC-IIは、ルリア理論に基づいた検査であり、情報を認知的に処理する「認知処理過程」と、認知処理過程を通してこれまで獲得した知識や技能の程度を示す「習得度」を調べる検査である(Kaufman, A.S. & Kaufman, N. L., 2013 ; 日本語版 KABC-II 制作委員会, 2013)。そのうち認知処理過程は、構成4尺度の中に1966年にルリアが提唱した「大脳皮質における統合活動の2つの形態」に合致する継次尺度と同時尺度が含まれている(Kaufman, A.S. & Kaufman, N. L., 2013 ; 日本語版 KABC-II 制作委員会, 2013)。藤田(2019)は、継次処理と同時処理の2つの認知機能のアンバランスさを認知の凸凹(強い能力と弱い能力の差異が大きい状態)としてとらえて、支援に活かすことの重要性を指摘している。

このように、多角的なアセスメントの重要性が広く認知されるようになった一方で、対象者がアセスメントを受けたことの効用を感じられる機会は多くない(隈元, 2020)という指摘があるように、アセスメントが生活の質の向上に繋がりにくいという課題もある。その背景には、精神医学や心理学の専門的知識を持たない対象者や周囲の人々が、心理検査の内容や結果を正しく理解することの難しさが関わっていると考えられる。例えば、認知処理の特徴を調べるためにKABC-IIを実施するとなった場合、認知処理とは何か、継次処理、同時処理とは何かといった、専門用語の説明が必要となる。また得られた結果は何を意味し、いかに日常生活の困り感と結びつくのか、そしてそれをどう日常に活かしていけばよいのかといった結果の解釈についても、対象者や周囲の人々が“理解しやすい”形で伝えていくことが求められる。松寄(2007)はこのような営みを「翻訳」と表現している。その翻訳を通じてアセスメントの

意義が対象者や周囲の人々の腑に落ちた時、はじめてアセスメントが日常生活に寄与するものとなるだろう。

“理解しやすい”形で伝えるための「翻訳」は、二つの観点があると考えられる。一つは、松寄(2007)が示すような、フィードバック面接において、いかに言語的、対話的に分かりやすく伝えるかという点である。もう一点は、感覚的にわかりやすい指標を用いて伝えるという点である。例えば継次処理、同時処理といった認知処理様式が、目に見えてわかる行動指標に反映されるとしたら、その行動指標を活用することは専門的知識を持たない対象者や周囲の人々も認知処理様式を感覚的に理解するためにも有益となりうるだろう。加えてそれが日常生活に根差した場面の行動で捉えられるとしたら、より実感して腑に落ちやすくなるのではないかと考える。著者らはこの観点から、行動指標として視線の動きに着目し、そのアセスメントへの活用可能性を検討している(中鉢・田中・薬師神・横山・綿引・北村, 2021)。そして視線の動きが心理検査の結果とどのように関連するか、そしてそれらが日常生活における困り感とどのように関連しうるかを検討し、“理解しやすい”アセスメントのあり方、すなわち日常生活の質の向上に寄与するアセスメントのあり方の検討を進めている。予備検討として日常生活に困り感のない成人に心理検査(WAIS-IV 知能検査, KABC-II)を実施し、その結果と視線の動きの関連を調べたところ、視線の動きはワーキングメモリの容量を示す指標の一つとなりうるものの、KABC-IIで測定された認知処理様式との明らかな関連は認められなかった(田中・薬師神・中鉢・横山・綿引・北村, 2021)。

今後、日常生活に困り感のある人を対象に田中他(2021)と同様の検討を実施する必要があるが、困り感がある人を対象に検討する場合には、単に認知特性と視線の動きの関連を検討するだけでは不十分と考えられる。対象者やその周囲の人々がフィードバックを活用していくためには、それがいかに日常生活の困り感を反映するか、あるいは対象者や周囲の人々にとって困り感の理解に繋がらうかという、困り感を軸とした検討も必要

である。そこで本研究ではまず、日常生活に困り感のある人の困り感の様態を詳細に明らかにすることを目的とする。その上で、その背景に想定される認知特性や視線の動きについて検討し、対象者や周囲の人々にとって“理解しやすい”アセスメントのあり方を検討する一助とする。

方法

調査対象者

認知処理様式および日常生活における困り感に関する後述のアンケート調査を機縁法で実施し、16名から回答を得た。その中で「仕事、家事、育児などの日常生活において、自分の認知機能で苦手なことがあると感じる。」もしくは「日常生活における、自分の認知機能や情報処理で苦手なことについて困ったり、悩むことがある。」の質問に「非常にあてはまる」～「全くあてはまらない」の5件法で回答を求め、「非常にあてはまる」もしくは「どちらかといえばあてはまる」と回答し、インタビュー調査に同意が得られた3名を対象とした(表1)。なお、3名はいずれもDSM-5(American Psychiatric Association, 2013; 日本精神神経学会, 2014)に既定される診断は有していない。インタビュー調査は2021年12月に実施された。

表1 調査対象者の概要

調査対象者	年齢	性別 (自己申告)	育児経験	就労
A	40代	女性	有	有
B	40代	女性	有	有
C	40代	女性	無	有

調査内容および手続き

アンケート調査 ウェブアンケートシステム Google フォームを使用して実施した。調査内容は、認知処理様式の自己評価および日常生活における困り感の様態についてであった。認知処理様式の自己評価は、藤田(2019)に掲載されているチェックリストを使用した。このチェックリストは日常生活に関する問が10問あり、それぞれ2肢から当てはまる方を選択してもらうことで、情報を順番に処理していくことが得意な継次処理タイ

プ、複数の情報を関連付けて同時に処理していくことの得意な同時処理タイプのどちらに当てはまるかをみることができるものである。日常生活における困り感の様態については、はじめに困り感の自覚や程度についての質問3問(「仕事、家事、育児などの日常生活において、自分の認知機能で、苦手なことがあると感じる。」、「日常生活における、自分の認知機能や情報処理で苦手なことについて困ったり、悩むことがある。」、「自分の認知機能の特徴について、詳しく知ってみたいと思う。」)を行った。その後、仕事、家事、育児、過去の学生生活、コミュニケーションの各場面における困り感について、具体的なエピソードを自由記述式で回答を求めた。

インタビュー調査 はじめに、アンケート調査で尋ねた認知処理様式の自己評価にかかわって、継次処理、同時処理について説明を行った。また、視線の動きとの関連を検討していることもあわせて伝えた。3名ともに認知処理について弱いところがあると感じており、視線の動きについても苦手と感じる時があるとのことだった。その上で、日常生活における困り感の様態について、アンケート調査の回答に基づき半構造化面接の形式で尋ねた。調査はウェブ会議システム Zoom Meetings を用いて実施した。所要時間は1名につき約1時間であった。なお、調査対象者の同意を得た上で、インタビュー時の音声をインターネット環境から遮断されたレコーダーにて録音した。

分析

アンケート調査で尋ねた認知処理様式の自己評価については、10問のうち継次処理優位にあたる選択肢を選択した度数をカウントし、6-10問を継次処理タイプ、5問をバランスタイプ、1-4問を同時処理タイプとした。

インタビュー調査の内容は、事例ごとに逐語録を作成した。対象者の困り感についての語りは、具体的な困り感のエピソードに加えて、その背後にある要因の推測や対処法等についても語られた。そのため、対象者の解釈も含めて困り感の様相をとらえることが妥当であると判断し、高濱・渡辺・坂上・高辻・野澤(2008)を参考に発話内

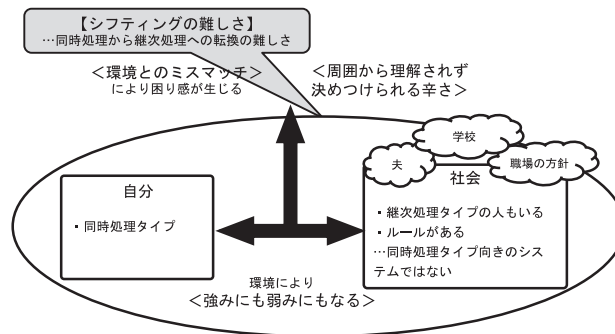


図1. 事例 A の日常生活における困り感の様態と背景要因の想定

容を一覧表に整理し、語られた困り感のエピソードについて、その要因や対処法等にかかる対象者の解釈が共通もしくは類似すると考えられるエピソードを横に繋げて記入し、異なる捉えがなされたエピソードは新たに下に欄を設けて記入した。その後、臨床心理学的観点から、抽出された困り感のエピソードがどのように認知処理様式や視線の動きと関連していると想定されるかについて、著者のうち3名が協議し検討した。

倫理的配慮

本研究は、青山学院大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会の承認を得て実施した（研究番号：青19-27）。調査対象者にはインフォームドコンセントを行い、個人情報保護、調査参加中断や撤回の権利、収集したデータの取り扱い等について説明の上、書面で同意を得た。

結果と考察

日常生活における困り感の様態について、背景要因の観点から記述していく。なお、抽出された対象者の解釈は< >で、臨床心理学的観点からの背景要因の想定は【 】で示す。また、対象者の語りは斜体で示す。

事例 A

分析の結果、対象者は自身の困り感はい環境とのミスマッチ>により生じていると感じており、自身の認知処理の特徴は環境により<強みにも弱みにもなる>と捉えていることが想定された。また自身の認知処理スタイルが<周囲から理解され

ず決めつけられる辛さ>も感じていた（図1）。

対象者は自身の認知処理スタイルがはっきりとした同時処理タイプであるという自覚を持っていた。それは認知処理様式の自己評価の結果が継次：同時=0：10で明らかな同時処理タイプであったこと、また「(家事など様々なことを)私は同時にやってるんです」との語りにも示されている。<環境とのミスマッチ>というのは、対象者がそのような自身の認知処理様式それ自体に由来して困り感が生じていると認識しているのではなく、相手との関係の中で、またはその環境で求められることによって、困り感となりうると認識しているということである。それは「一人だとまあそんなに問題ないんですけど、自由にやれるので。特に主人がうるさいわけではないんですけど、継次処理タイプなので。」という語りに示されている。対象者は、「一番は洗濯を干す時。(四角いピンチハンガーに干す時) 目についたところから干しちゃうので、斜めになったり。それも自分はいいいんですけど。偏って半分だけで終わっちゃうとか。(夫は) “なんでそんな干し方してるんだ、おかしい” って言うて。」と認知処理タイプの異なる夫から家事の仕方について指摘を受けることを具体的なエピソードとして語った。

そのような<環境とのミスマッチ>は、学生生活のエピソードからも抽出された。学校は問題の解き方や手順など「決められたルールがきつい」と話し、ルールを守るという学校の風土が自身の同時処理タイプと合っていないために困り感が生じていたと捉えていた。「(決められたルールを守

ることを) みんなは努力してやってると思ってたので、みんなは約束を守って偉いな、我慢してやって偉いなと。自分が(ルールを守るということを)やるなら我慢してやらなきゃだから。」と語っている。

これらの困り感について、臨床心理学的観点から要因を想定した時、【シフティングの難しさ】、特に継次処理へのシフティングの難しさが関連している可能性があると考えられうるだろう(図1)。つまり同時処理的に全体を捉えて判断、行動することが得意な一方で、場面に応じて継次処理に切り替え、順を追って判断、行動することをしにくい特徴があると考えられる。例えば洗濯のエピソードについて考えてみた時、おそらくピンチハンガーの全体を見た上で、その後“ここから順に干す”など計画を立て、それに沿って順に注意を向け、視線を滑らかに動かしながら干していくという継次的処理への転換がしにくいのだと考えられる。学生生活での困り感も、継次処理的な課題遂行を求められることの辛さ、言い換えれば同時処理的な自身のスタイルからシフティングしなければいけないことの辛さに起因していると推察される。それだけ継次的な処理へのシフティングは、対象者にとって無意識・自然に行えるものではなく、負担を伴うものなのだろう。

そのように困り感が生じている一方で、自身の認知処理様式が環境とマッチする場合には強みとなった経験もあったと感じており、自身の認知スタイルが<強みにも弱みにもなる>と解釈していることがうかがえた。それは「怪我した時とか、判断みたいなのは一瞬で出来るというか。継次の方がどう判断しているか分からないですけど。同時に、怪我を処置しながら全部できるみたい。一気に5,6個のプランを常に考えている感じです。明日の予定とかも全部そうですね。5,6個同時に考えてメリットとデメリットを判断してるみたい。」という語りに示されるように、育児における臨機応変な対応や休日の過ごし方のアイディア創出に繋がっていると捉えている。また仕事においても、職場の方針により強みとなったり弱みとなったりした経験をもっていた。同時処理タイプが強みとなったのは、中華料理の野菜を切る仕

事で、「指示が、玉ねぎと人参とピーマンを〇時までにはやっておいてという言い方だった。私は人参飽きたら次玉ねぎとか、全部バラバラでやりたいことやるんですね。だから全部を50パーセント終わってるみたい。それを厨房に渡すから、(玉ねぎ・人参・ピーマンそれぞれが)半分でもできていた方がいいわけですよ。全部を50パーセントやった方がいい仕事なので私はすごい向いてたんですけど。みんなは玉ねぎ全部終わらないと次人参いけなみたいな感じで結局仕事終わらないってなるみたい。そこでは私が一番優れていたというか。」と語った。一方、弱みとなったと捉えているのは、保育方針や指導のマニュアルが細かく定められている保育園での仕事で、「あれはきつかったですね、(手順を)通り越してやっちゃうので。ここよりこっち先にやったほうがいいんじゃないとか。(中略)そこの方針と合わない時は悲惨ですね。」と述べた。

このように対象者は自身の認知処理スタイルについて、ある程度客観的な理解をしていると捉えられる。その一方で、自身の認知処理スタイルが<周囲から理解されず決めつけられる辛さ>を感じていた。それは学生時代のエピソードにおける「言われること(が辛い)ですよ、先生に。“なんで無視する”とか“ルールを守らない”とか。板書も全然できなくて、もうしなかったですね。聴覚優位なんですけど、耳で聞いたことをノートに書くっていう感じで。でもそうすると“ノート書いてない”ってなって、小さい頃は怒られた。“聞いてない”とか“授業受けてない”みたい。」という語りに示される。また、夫との関係性の中でも「掃除と洗濯と料理を同時に私はやってるんですね。パーセントで言ったら今50パーセント、50パーセント、50パーセントで、私は半分やってるってなるじゃないですか。でも主人は“何もやってない”ってなるんですよ。」と対象者なりの手順で進めていることを“やっていない”と決めつけられることを語っていた。

事例 B

分析の結果、対象者は自身の認知処理の特徴として<ルーティン化されていることが得意>であ

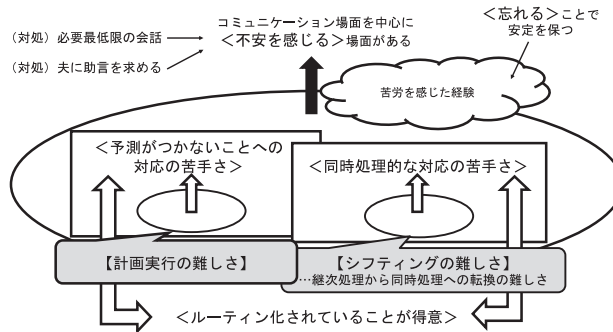


図2. 事例Bの日常生活における困り感の様態と背景要因の想定

ると理解しており、一方で<予測できないことへの対応の苦しさ>や<同時処理的な対応の苦しさ>が日常の困り感の背景にあると感じていることが想定された。加えて、そのような難しさに関連してか、日常生活で<不安を感じる>場面があること、高い困り感を感じた経験は<忘れる>という無意識の対処をしてきたこともうかがえた（図2）。

「やる順番とかが決まっちゃってるので、ルーティンに入ると得意ですね。」という語りに示されるように、対象者は<ルーティン化されていることが得意>であると自身の特徴を捉えていることが明らかとなった。家事でいえば洗濯がそれにあたり、「男性（もの）であれば男性（ものと一緒に洗う）、女性（もの）であれば女性（ものと一緒に洗う）とか、靴下は絶対この場所に干すとか、決まってます。これは譲れなくて。」と自身なりのルーティンが確立されていた。これは認知処理様式の自己評価が継次：同時＝8：2で継次処理タイプであった結果とも重なる。

反対に<予測できないことへの対応の苦しさ>や<同時処理的な対応の苦しさ>があり、それが日常の困り感の背景にあると感じていた。<予測できないことへの対応の苦しさ>による困りを特に感じていたのは、育児であった。「どういう動きをするのかとか、全然予測がつかないので。突然泣いたりするじゃないですか。やっぱりちょっと、先の見通しが立たないのが大変でした。やっぱり自分の、私の中にすごいルーティンがあるので、それを崩されるのが嫌で、子育てやっぱ大変

だな、自分の思い通りにいかないし、子どもは。」と感じていたという。「子育てで得意なこととはなかったです。」とも断言しており、多分な苦勞を重ねてきたことがうかがえた。また<同時処理的な対応の苦しさ>による困り感については、例えば料理の場面で「唐揚げとみそ汁と同時に作るということはできないので、唐揚げは唐揚げを下処理して、終わったらみそ汁の具を作るという感じで、一つ一つやないとパニックになっちゃって、抜けちゃうので。時間かかっちゃうんですね。急に来客あったりすると（手順が崩れるので）ちょっと困ります。」というエピソードが語られた。

これらの困り感について、臨床心理学的観点から要因を想定した時、<予測できないことへの対応の苦しさ>には、背景に【計画実行の難しさ】がある可能性が考えられるだろう（図2）。計画実行は実行機能の一部であり、目標に向かって行動を維持しながら、経過を鑑みて計画や方法を柔軟に修正する力を指す（福井，2010）。対象者の場合、目標に向かって課題を遂行するためには、自分の中で決められた手順で作業することが重要であり、それが崩れると目標を見失い、結果としてその時とるべき行動の判断が難しくなりやすいのだと考えられる。また、<同時処理的な対応の苦しさ>は、事例Aと同様に【シフティングの難しさ】が関わっていると考えられる。事例Bの対象者の場合は、継次処理から同時処理へのシフティングの難しさがあるだろう。シフティングも実行機能の一部とされていることを踏まえると、

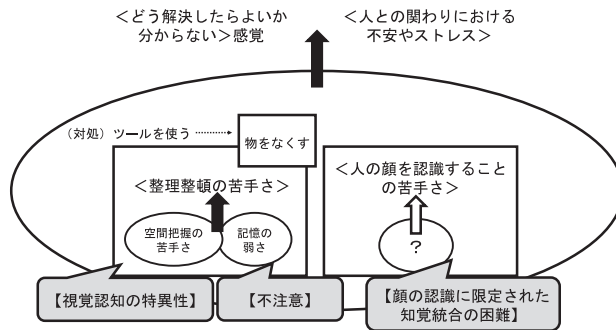


図3. 事例 C の日常生活における困り感の様態と背景要因の想定

対象者のとらえる<予測できないことへの対応の苦手さ>と<同時処理的な対応の苦手さ>は、背景に共通して実行機能が関わっていることが想定される。

加えて、コミュニケーション場面で<不安に感じる>ことがあると、複数のエピソードで語られた。例えば福祉関連の仕事では、「何をお話したらいいか、相手が何を求めているのかわからなかったり、相手が人だと困ってしまいますね。(中略)私もストレートに物事を言ってしまうので、オブラートに包めないんですね、言葉を。それで利用者さんが来なくなっちゃったらどうしようとか、私の一言で落ち込んでしまったらどうしようとか。」と、相手の意図を推し測る際や自身の言葉が相手にどう受け取られたかという点で不安を感じており、友人との LINE におけるやりとりでは、「こっちは怒ってないんですけど、書いててももしかしたら相手は違うようにとらえてしまうかもとか思ったりもするんです。」と同様の不安を語っていた。コミュニケーションは、相手の言動やその場の状況といった予測がつかないことへの臨機応変な対応が求められる場面であり、また相手の表情、言葉、しぐさ、声色等、複数の相手に関する情報に注意を向けたり、相手の言葉を聞きながら自身の考えを整理し伝えたりと、同時処理的な遂行能力が求められる典型的な場面であるといえる。コミュニケーション場面における不安の背景にも、【計画実行の難しさ】や【シフティングの難しさ】が関わっていることが推測された。この<不安に感じること>に対して対象者は「(仕

事では) 日常的な会話はなくって、仕事上だけの会話しかしてないです。」と確実に必要最低限の会話にとどめたり、友人との LINE のやりとりでは「ちょっと主人に聞いたりとかしました。」と他者に助言を求めたりすることで対処する等、自身なりの対処を既に行っていた。

このような認知の特徴により、これまでの生活の中で苦勞を感じた経験が少なからずあったこともうかがえ、対象者はその記憶を<忘れる>という無意識の対処により、精神的な安定を図っていたことがうかがえた。それは、育児について語った際の「予測がつかないと、パニックになっちゃうんですよね。(中略)辛い出来事なので、半分忘れちゃってるとこともあるんですけど。」という言葉や、学生生活について語った際の「実はちょっと記憶がほとんどあんまり。(中略)嫌いなことは全て頭の中から消去しちゃってる感じなので。」という言葉に示されている。現在は自身の得意と苦手について理解が深まり、自身なりの対処法も獲得しているが、困り感の高かった渦中は精神的混乱が大きかったことがうかがえた。

事例 C

分析の結果、対象者は具体的な困り感として<整理整頓の苦手さ>と<人の顔を認識することの苦手さ>を特に自覚していた。困り感の背景要因を推測したり、自身なりの対処を獲得していたりする面もある一方で、<どう解決したらよいかわからない>感覚も抱えていることが想定された。また自身の苦手さから、<人との関わりにおける

不安やストレスを感じやすい状態にあることもうかがえた（図3）。

＜整理整頓の苦手さ＞は、「どこに何を置いたら整理整頓されるのかがわからなくなってしまうんですね。なので、冷蔵庫の中とか、冷凍食品もどう詰めてしまったらいいかわからなくなってしまうって、しょうがないから冷凍だけ冷蔵庫にスペースがあるので入れておいたら、友達が来た時に“いやこれ入るよ”ってきれいにに入れてくれたりすると、やっぱり私できないんだなと思って。」と友人との比較から苦手さを実感するエピソードにより示されていた。この苦手さは、物をなくすという事態にも繋がっており、困り感をより高めているようであった。仕事場面において、「同じものを何回か買ってもらったり。専用の、その人だけしか使わない道具があるんですけど、なくすんですよよく。」というエピソードが語られている。

また＜人の顔を認識することの苦手さ＞は、「人間関係で、私、人の顔を認識できないんですね。」という言葉に表された。「会社の人だったり、あいさつするけどプライベートで会ったりしないという人だと、朝すれ違っててもわからない」ということが起きているという。この苦手さに気づいたのは小学生の時だといい、「妹は私の同級生の顔も名前もなんとなく覚えられる人なんです。学年も違うのに、“あの人ってお姉ちゃんの友達じゃないの”って。でもすれ違ってても私はわからないんです。親も、“そういえばあなたは同じクラスの子の顔も全員覚えてないでしょ”って言われて。」と当時を回顧した。

この二点が対象者にとって代表的な困り感であるが、＜整理整頓の苦手さ＞については、空間把握の苦手さと記憶の弱さが関係しているのではないかと、自身なりに推測していた。それは「そういう物の整理整頓、空間認識が苦手だと思います。」、「（片づける場所が）決められていて、特に口頭じゃなくてラベルで書いてあると、そこに（片づける）、というのはできるんですけど、何もなくてただ口頭で“これはここね”と言われると、多分忘れてしまう、記憶として定着しないという感じです。」という語りに示されている。臨床心

理的観点から要因を検討した時、対象者が感じる空間把握の苦手さをはじめとする【視覚認知の特異性】や【不注意】等、複数の要因が絡んでいる可能性が考えられる（図3）。視線の動かし方、視覚的な記憶、視覚情報からの推論、また注意の維持や転換、配分等を評価し、困り感の要因と対処が結び付いて理解される必要があるだろう。また＜人の顔を認識することの苦手さ＞については、一つの可能性として【顔の認識に限定された知覚統合の困難】があることが考えられる。顔の認識の困難は相貌失認ともいわれ、小西（2016）によると、そのような状態にある人の認知の特徴として、相貌認知以外では知的機能や記憶機能、視知覚機能に目立った問題は認めず、視線の動きに関しては研究知見が少なく共通した特徴が明らかとなっていないという。ただし、背景として目や口等パーツの特徴に関する情報と、パーツの構成（配置）に関する情報を統合して、全体的に処理すること（holistic processing）の困難が想定されている（小西，2016）。事例AやBの対象者は認知処理様式の優位性が明確で、異なる認知処理様式へのシフティングの難しさが困り感の背景に想定されたが、事例Cの対象者の場合には、認知処理様式の自己評価は継次：同時＝5:5でバランスタイプであり、これと困り感の関連は想定しにくい。やはりそれよりは、視知覚認知を中心とした特定の認知機能の特異性が困り感に関わっていると考えられる。

対象者は、＜整理整頓の苦手さ＞に起因する物の紛失に対して、「最近Appleで鍵とかをなくさないように音が出るものがあった、それが意外と重宝してます。」とツールを利用して自身なりの対処も行っていた。しかし、「どうやって解決したらいいか。字が汚いだったら、字をきれいにするために何回も練習するとか教室に通うとかあると思うんですけど」と根本的な解決策が見いだせず、＜どう解決したらよいか分からない＞感覚を抱えていることがうかがえた。それ以上に＜人の顔を認識することの苦手さ＞に対しては背景要因や有効な対処法が思い至らず、＜どう解決したらよいか分からない＞感覚が強い様子であった。

さらに、これらの困り感があるために＜人との

関わりにおける不安やストレスを感じやすい状態にもあることもうかがえた。仕事で物をなくして買ってもらった後に、そのなくし物が出てくるということがあった際には、「買ってもらった人には言えずにいます、二個持ってるってことは。」と、気まずさのようなものを感じているようであった。また人の顔を認識しにくいことに関わっても、「すごく私のことを知ってくれている人は、私が人の顔を認識できないことをわかってくれるのでいいんですけど。」「顔を覚えられないから名前も何となくなので、しっかり覚えられないので、新しい環境に身を置く時とかはすごくストレスですよね。」と語った。

総合考察

本研究では、視線解析のアセスメントへの活用に向けて、日常生活における困り感をもつ人の困り感の様態を詳細に明らかにすることを目的として、インタビュー調査を行い、想定される背景要因も含めて検討を行った。

困り感の様態の特徴として、第一に3名の対象者はいずれも、家事、育児、学生生活、仕事、コミュニケーションのうち複数の場面で困り感を感じており、想定される要因が共通もしくは類似していた点が挙げられる。それらの困り感と類似する困り感を、学生時代から抱えていたようであった。

第二に、困り感に関連しうる要因として、対象者なりの推測も踏まえて臨床心理学的に検討した結果、大きく実行機能（計画実行やシフティング）の弱さ、視覚認知に関わる特異性が想定された。しかし、視線の動きについては言及が少なく、関連の検討が不十分であった。言及が少なかった理由としては、視線の動きは、自覚しにくく、無意識的に処理されていているため、困り感とつなげて感じにくいことが考えられる。日常生活においては、ただ眺めているだけというように、無意識的・受動的に「見えている」という状態もあるだろう。一方、意識的・主体的に「見ること」も少なくない。しかし、どちらも「目覚めている」という当然の前提においては、相対的に意識に上ることも少ないのかもしれない。視覚認知に難しさがあったとしても、周囲の人々はそれを視線の動きと結びつけ

てとらえにくく、また本人にとってはそれが当たり前であるため、困る点として意識化されにくい面であるともいえる。そして自覚的にならないことには対処がしにくく、また周囲にも伝えにくく、理解されにくいということにも繋がるだろう。

第三に、対象者は日常生活の困り感について“困っている状態”のみを認識しているわけではなく、その要因を自身なりに推測したり対処を試みたりしているという点である。単に受け身的に“困り感”を抱えているわけではなく、主体的に困り感と向き合っている状態であることが推察された。

今後は、本検討から想定された実行機能の弱さや視覚認知の特異性等の関連要因を踏まえ、心理検査のテストバッテリーや視線の動きの測定条件を設定し、関連を検討していくことが求められる。また、視線の動きは日常生活において着目されにくい指標と考えられるが、だからこそ、見ることにまつわる機能不全が意識の上では「困り感」として現れる可能性がある。そして、前述のように認知処理様式をアセスメントするための有力な指標の一つとなりうるため、日常生活場面での困り感と視線の動きについて、本人もしくは周囲の人々が気づきやすい場面や認知処理様式を反映しやすい場面等、今後も探索的に検討する余地があるだろう。技術の向上とともに、動的な場面での解析も可能となっており、今後の発展が待たれるところである。

また、今回見出された対象者の困り感との主体的な向き合い方への理解は、心理検査のフィードバック面接に活かされると考えられる。紀平（2002）が、臨床場面においては“疾病”という専門家がとらえる科学的側面ではなく、患者や家族の体験的側面としての“病い”をどう意味づけるかという点が重要であるとする Kleinman（1980：大橋・遠山・作道・川村訳，1992）の「病気の説明モデル（explanatory model）」を紹介しているように、支援者が対象者の体験的な困り感の世界に丁寧に耳を傾ける必要があろう。

松寄（2007）の言う「翻訳」を試みれば、「同時処理」においては、複数の事象に頻繁に目配せを繰り返す、生理心理学的な言い方をすれば、「飛

越運動（サックード）」が、モニター画面に現れるであろう。一方、あるものを一定時間じっと見つめる、「継次処理」のときには、「凝視（フィグゼーション）」が記録されるであろう。

「もう少し何とかならないのか」という困り感が認知処理スタイルにその一因があるのなら、慢性的に固定していながら十分に機能しない認知処理スタイルを反映するであろう視線モニターが気づきの体験のヒントになるかもしれない。

付記

本研究は、青山学院大学教育人間科学部附置教育人間科学研究所の助成を受けて実施した。

引用文献

- American Psychiatric Association (2013). *DIAGNOSTIC AND STATISTICAL MANUAL OF MENTAL DISORDERS FIFTH EDITION*. (米国精神医学会 日本精神神経学会 (監) (2013). *DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル* 医学書院)
- 中鉢路子・田中里実・薬師神玲子・横山舜・綿引一貴・北村文昭 (2021). 発達障害の臨床心理アセスメントとフィードバックー認知機能と眼球運動に着目してー 青山心理学研究, 20, 9-17.
- 福井俊哉 (2010). 遂行（実行）機能をめぐって 認知神経科学, 12(3+4), 156-164.
- 藤田和弘 (2019). 「継次処理」と「同時処理」学び方の2つのタイプ 図書文化.
- Kaufman, A. S. & Kaufman, N. L. (2013). *Kaufman Assessment Battery for Children Second Edition*. (カウフマン, A. S. & カウフマン, N. L. 日本版 KABC-II 製作委員会 (訳編) (2013). 日本版 KABC-II マニュアル 丸善出版)
- Kleinman, A. (1980). *Patients and healers in the context of culture*. (大橋英寿・遠山宣哉・作道信介・川村邦光 (訳) (1992). 臨床人類学ー文化の中の病者と治療者 弘文堂)
- 紀平省悟 (2002). 自閉症児の早期養育者面接ー説明モデルの共有と障害受容ー 発達障害研究, 24(3), 293-303.
- 小西海香 (2016). 発達障害における顔認知 高次脳機能研究, 36(2), 207-213.
- 隈元みちる (2020). 参加者への質問紙調査からみる親との協働的 WISC-IV フィードバックの親支援効果 兵庫教育大学研究紀要, 56, 127-132.
- 松崎くみ子 (2007). II 部3 章2 医療機関でのアセスメントとその利用 篁倫子 (編著) 学校で活かせるアセスメントー特別支援教育を進めるためにー (pp. 131-137) 明治図書
- 高濱裕子・渡辺利子・坂上裕子・高辻千恵・野澤祥子 (2008). 歩行開始期における親子システムの変容プロセス：母親のもつ枠組みと子どもの反抗・自己主張との関係 発達心理学研究, 19(2), 121-131.
- 田中里実・薬師神玲子・中鉢路子・横山舜・綿引一貴・北村文昭 (2021). 心理教育的アセスメントにおける視線解析の有効性ー発達障害児・者支援への応用に向けた臨床発達心理学的検討ー 青山心理学研究, 20, 1-8.